

職業教育研究会主催・文部省後援

産業教育全国協議会の概況

昭和二十八年十二月廿七・八日

参加者予定を越す

昭和二十七年夏以来、春夏冬の休みを利用して開催してきた研究協議会を、昭和二十八年もおしつまつた十二月廿七、廿八日冬期研究協議会として開催の予定をたて、文部省の後援を得て、産業教育全国協議会として開くことにした。

今回は本研究会の会員中から、新しい顔ぶれで一年間に結ばれた優秀な実践家三十八名を選んで招聘したところ、欠席者は僅かに五名で、それに特に希望して参加された方もあり、本部よりの参加者を交えて、別掲のようになり、本邦より三十名位を目標として計画を立てていたので、大いに番ぐるわせとなり、教育会館の

会場もぎつしりつまつて狭い感があつたし、宿舎の方へも予定人員超過を交渉せねばならない状態であつた。

これはいかに全国的に関心が高まり、その熱意に燃えてきているかを示すものであつて主催者側ではうれい悲鳴をあげた次第である。

第一日（十二月二十七日）

ぎつしりつまつた教育会館三階の集會室。定刻の一時を十分すぎ、杉山一人氏の司会により池田種生氏の経過報告と挨拶がつぎのように行われた。

要旨 職業教育研究会が最初に研究協議会を開いたのは昭和二十七年八月、箱根で三日間行つたのが始まりで、同年十二月末には

東京都若葉荘で、二十八年三月末には家庭科を中心に箱根で、二十八年夏は御承知のように全国十カ所で開催した。その間廿八年三月九日中央産業教育審議会の建議案があつて、わが研究会の研究が反映したように思う。しかしわれわれは、実家家の立場からそれとは別個に研究を続け、協議会を開いてきたので、今回は本年八月の教育内容を中心にしたものから一歩を進めて、学習教材のとり上げ方を中心にして協議願いたいと思う。今回の集りは、特に会員の中から選んだ方であるが、全国的にエキスパートの集りと見られるので、その成果を大いに期待している。

つぎに文部省の長谷川事務官から、後援としての挨拶ならびに、現在進行している「中

学校職業・家庭科について」の専門委員会の状況、文部省の意図などを説明された。その大要は下記の通りである。

要旨 中央産業教育審議会の建議によつて文部省としては専門委員会にかけて、現在の学習指導要領を取り扱う上の指針を出したいと思つて急いでいる。本学年度末の三月までにはある程度の報告ができるように努力している。皆さんは実践の上で優秀な効果をあげていられる方ばかりと思うのでその方針でおし進めて頂いてよいと思う。本研究会の池田氏からは、文部省でだすのはどうせ大したことはない。実際家の推進力こそ頼みになるといわれた。(笑)御承知のように、文部省にもいろいろ事情があるので、思うにまかせぬ点もなきはないが、われわれもできるだけ皆さんの期待にそむかないように努力したいと思つている。

つづいて同じく鈴木文部事務官から研究協議会を進めるに当つてのオリエンテーションがなされた。

要旨 ここでは私の個人的見解を述べる。中央産業教育審議会の建議による職業・家庭科においては、基礎的技術と基本的活動を通じて国の一般的課題解決に向かうという

立場から、学習系列を職業コースと家庭コースとにわけられる。その場合必修を共通と傾斜にわけられることになり、傾斜コースには地域の課題がとり上げられる。この場合の「地域」を私は従来考えられたようなものではなく、地域にある教材を通してそこにひそんでいる問題解決に向わせるという考え方で、全国的共通ということも強調するあまり、劃一的な傾向になることを恐れるのである。だが全般的な国の課題を忘れてはならないので、そうした点が實際的に、教材のとり方の上で本協議会では問題になるのではないかと思う。

以上で文部省側の発言を終り、ここで協議会を進めていくについて座長副座長を選ぶこととなり、司会者一任となつて、座長に池田種生氏、副座長に石川勝蔵氏が推薦された。つづいて中村邦男氏より前掲の試案について全体と農業的分野についての説明があり、清原道寿氏より工業的分野、流通分野について説明し、社会的経済的な知識理解について原案に対して補足的な説明があつた。

質問討議白熱化す

それより質問討議に入り、まず文部省側へ

家庭科がふくまれる。職業・家庭科の中に産業教育をふくむという考え方はおかしい。

後藤(大分市) 私たちは帰つて報告をする際、いろいろ質問をうけるのであるが、中央ではそれぞれ意見があつて困る。中央産業教育審議会はどうか、はつきり方向を示されたい。

長谷川(文部省) 御意見もつとも思つて文部省では各自の意見をまとめることはできないので、皆さんの実践に照して、判断して頂くほかないと思つた。

座長 それについては、いろいろな意見があつてよいのではないでしようか。一つに統一しようとするのは非常に危険であると思つていますが。

つづいて職業教育研究会提出の教育計画への質問討議に入る。

座長 ではこれから提案された原案について質問と討議を一しよに行いたい。最初にお断りしておきたいことは、今回の研究協議の中心議題についてお手元へお配りしたあるものは、いろいろ研究を重ねたがまだ未完成のもので、実は昨夜も議論がふつとあつてまだ結論を得ていない状態である。つぎにこれは一つの基準として全国的に考

えたもので、皆さんの個々の学校にすぐあてはまるものとはいえない。従つてその観点から討議されない。本研究会のモットーとして一切の体裁や階級や形式的な儀礼的なことはぬきにして、直接ぶつかつて真理を追究する形をとつてきているので、少しも遺憾なく意見を吐露されたい。

これから質問が集中的に起り、原案に対する鋭い批判が加えられた。その中より主なるものを摘記する。

吉田(千葉県) 第四の共通領域に水産がないがその理由を伺いたい。

中村(職研) これは全国共通で最低のものを示したので、水産のような地域的なものは傾斜Aにゆずつたのである。

柳楽(島根県) 第二の時間配当であるが、これはどのくらいの学校が標準になつているのか。

清原(職研) 大体十四学級から十六学級ぐらいの学校を標準にした。

豊(清水市) 共通領域を一年に4分の3、二年に4分の1、傾斜Aを一年に4分の1、二年にAを4分の3、三年で4分の2、傾斜Bを二年4分の1、三年に4分の2というよ

質問がむけられた。

佐藤(山形) 文部省と中央産業教育審議会産業教育振興法、それに職業教育研究会の関係など、よくわからないので説明してほしい。

長谷川(文部省) 中央産業教育審議会は、産振法という法律で定められたもので、それからの建議に基づいて文部省で指針を示すことになり、目下職業・家庭科については専門委員会で討議中である。文部省は必ずしも尖端を行くものではないから、それをまつまでもなく、実践的研究を進められてよいと思つている。

座長(職研) 職業教育研究会については、多くの方にはわかつていられると思つたが、昭和二十三年発足以来、実践家を中心に研究を続けてきたもので、純然たる民間の研究団体であつて、文部省に対しても常に批判を加えてきているもので、官制的なものとは何等関係はない。また出版社の中にできた名前だけの研究会でもない。全く独立した研究団体である。

後藤(岩手県) 産業教育と職業・家庭科の関係について伺いたい。

清原(職研) 産振法では職業科(家庭をふくむ)となつていて、産業教育の中に職業・

りに、細かくわけてあるが、その根拠をおたずねする。

中村(職研) これは会誌七月号では、普通と傾斜とだけになつてしたが、それを更に細分したので、傾斜Aは地域的な技術教材となり、傾斜Bは地域外的な理解教材を主として共通に不足したものを抽りことになる。

座長 機関誌七月号には理論的根拠を掲載し、八月の協議会のプリントで教育内容を示したが、今回は更にそれを発展させたいのである。

山本(静岡県) この原案では、共通領域を一年にとどめ、二年では4分の1、他は三年まで全部傾斜AとBにされているが、農村だからといって、必ずしも農業だけとは限らない。現に私の学校は純然たる農村地域であるが、卒業生の行方を調べて見ると、農業に従事するものは、ごく少数である。だから工業方面に相当力を入れている。男女の区別も除こうとしている。その意味で背けない。

長谷川(文部省) 私はこの間山本氏の三カ日中学校を見て費つたが、男女共通が極めて自然に行われていた。

中村(職研) 私が農業方面の案を作成したが、農村の方から農業教材の割当が少いとい

われるかと思つたのに、これは意外である。
林(新潟県) この案では、地域的(A)とか
地域外的(B)とか、傾斜の面が割合に多く、
國の一般的課題という点がばかされるように
思ふ。職業教育研究会が従来主張してきたこ
とと矛盾する点がある。

鈴木(文部省) この案をみて私見を述べた
い。地域性ということが限られた地域のこと
だけに終るとすれば、それは甚しい欠陥を示
すし、職業・家庭科の性格をそりしたものに
限定することは間違つてゐると思ふ。しかし
教育の現場で地域の中から問題を発見しそれ
と対決するという考え方は、教育上極めて重
要だと思ふ。だから、ここに示されたものは
ある意味では全部が共通であるともいえる
し、決して地域に妥協したことにはならない
と私は考へる。それらは國の一般的課題に結
びついて考えられるものと思ふ。

長谷川(浜松市) 従来職業・家庭科が教科
として明確性を欠き、他教科より軽んじられ
てゐるのは、共通的な目標と教育内容が確立
してゐないからだと思ふ。その意味から傾斜
領域というような考え方でなく、国語科や算
数のように、都市とか農村とかの区別をしな
い共通的なもの、強く打出す必要があると

半頃になつて床に入ったよりであつた。

第二日(十二月廿八日)

第二日は、午前八時まで朝食を終つて、
八時半から若葉莊の食堂で研究協議会を続行
された。

座長 どうも時間が少し足りない感で、
十分討議されないのではないかと思ふが、正
午までに終らなくてはならないので不悪御諒
承願い。結末がつかないでもお許し願いたい
林(新潟県) それについて少くとも昨日問
題になつた(1)教材配当、それに(2)社会的経済
的な理解の点だけはつきりしてほしい。わ
れわれはそれは土産に持つて帰りたい。

後藤(山形市) 昨日から各学校の状況も聞
かされ、相当高い理論的な意見もきいたが、
実践的な問題こそわれわれにとつて重要な
で、その点にもつと力を入れてもらいたい。

座長 今の御提案は大変よいと思ふので、
その三つの点を中心に進めたい。ただ理論と
実践の問題は、どうしてもこつした協議会で
はプリンシプルを求めようとするので、実践
に遠い議論のように見えるが、実はそれが大
切なことで、実践とどう結びつけるかは現場
で大いに研究してほしい。勿論そのことを念

私は考へる。従来は地域にのみとちこもりす
きた。これを全国的に共通な内容を持つ教科
にしてこそ、職業・家庭科の存在意義が明ら
かになると私は考へる。

涌島(鳥取県) ここに集つてゐる人以外は
この案を見た、また昔の農工商家庭にかえ
つたような感じを持つと思ふ。或は昔の郷土
教育と間違えられるかも知れない。この案を
作つた考え方は進歩的でも、実際には誤解さ
れやすいと思ふ。それよりも共通領域をしつ
かりと定めて、むしろ男子・女子のコースを
定めた方がよい。私の学校では、文部省がど
り定めようとも、その方針はかえないつもり
でやつてゐる。

この外強力な意見がでて、討議は白熱化し
た。ここにここでは地域性の問題について、
議論がふつとつして、現状への妥協を濃くし
て実際のねらつた原案が、散々に批判され
遂に結論にまで到達しないままに、予定の午
後五時となつた。そこで会議を一応打切つて
宿泊所である若葉莊へ向つた。

(編集子) 本記事は要点だけを記録した
中からとつたので、発言の意図を十分に伝
えてゐないかも知れない。また発言内容、
順序等に間違ひがあるかも知れないが、そ
頭において論じ合ふことは大切であると思
ふ。そこでまず教材配当についてどうぞ……

林(新潟県) 地域を農・工・商というよう
にわけられてゐるが何を基準としたのである
か。地域性の問題は学習や仕事の結果として
わかれてくると思ふが。

鈴木(文部省) この案をみて私が昨日述べ
たことを繰返すことになるが、決して行政区
劃のような意味で考へてゐない。どこまでも
問題解決という立場から、地域的なものを考
へてゐるのである。

井上(兵庫県) 地域の問題解決のための課
題教育を行うことは大切である。父兄の要望
地域の課題に應えるのでなければ、教育は推
進されないと思つてゐる。

座長 それはすべての教育について言える
ことであつて、特に職業・家庭科でそのこと
を強調する所の問題があるのではないか。

山本(静岡県) 私は地域を自分の村である
三カ日町と浜松市から豊橋まで位に広げて考
へてゐる。従つて農業地域だというように定
められないのである。

長谷川(浜松市) そりいう地域の考へ方は
おかしい。それならもう少し先の名古屋市や
静岡市はどりなのかといいたい。そんな風に

の責任は全部記録者の負うべきものである
以下同)

夜のこん談(若葉莊)

午後六時半には夕食を終つたので、それか
ら地方報告と懇談に入つた。全国各地からの
集りであるので、大阪市の磯部氏から始つた
地方報告は、それぞれ自校の様子や府県下の
状況にまで及んで意義深くきかれた。

中には設備のないところから築き上げた苦
心、また周囲の無理解を克服しながら、技術
教育の本筋に進んだ体験談、指導主事の干渉
の甚しい所、逆に積極的に援助する所などが
語られた。最も早くから実践している学校に
西に愛知県新川中学校、東に小田原市第二中
学校があり、それぞれ今日までの歩みが語ら
れたのも意義深かつた。また新潟県のように
校長会も応援して、全県的に産業界の線を
打出してゐるところもあり、その多くが産業
教育指定校からの参加者ではあつたが、地域
全体の関心を高める動きもぞかれた。

かくて八時半頃まで続いた地方報告を打切
り入浴して寝る前の時間は、互にこん談が続
けられた。鈴木文部事務官を囲んでの二回は
あれこれと話がつきない模様で、漸く十一時

考へてくると、結局日本全体の問題となる。
単にその辺に就職するからというのでは、一
つの職業準備教育の考へ方である。そりいう
ことから離れて、職業・家庭科の教材配当は
考へられるべきだと思ふのである。

望月(山梨県) 職・家庭科には必修と選択が
ある。他教科と同じように共通のミニマムな
ものをおさへ全国各市町村で共通するものを
とり出し、選択の方へ傾斜A Bを持つていつ
て、必修は共通一本にしたらどうか。

吉田(千葉県) 共通一本には非常な危険が
ある。それでは大企業のみ片よつて、地域
にある中小企業の面がおろそかになる。

座長 そりとは限らない。共通は必ずしも
大企業をさしてゐるのではないでしょう。

稲垣(愛知県) 学習分野における領域のわ
け方は、重大な問題である。私の学校ではカ
リキュラムを帰納的に作つてゐる。新しい職
業・家庭科は産業界別の学習ではなく、帰納
的な学習でなくてはならないと思ふ。仕事に
よつて自然にウエイトもできるし、当然そこ
に地域性もでてくる。中学校における基礎的
技術教育は、共通課題をとらえていくことに
よつて、地域性も加味されていくと考へてい
る。

林(新潟県) 職業・家庭科のミニマムとは何か、と考えてくると、必修・選択の限界が問題になる。教育内容において、日本人としてどこにいても必要なものをおさえることが教育基本法に合致する。私は共通と傾斜A Bの教材配当は、この試案とは逆に考えたい。

座長 課程を(1)都市男子向 (2)都市女子向 (3)農村男子向 (4)農村女子向とわけ、共通領域の内訳を農・工・商家庭としたのは、誤解されやすいが、それは以前の実業教育的なわけ方を意味しているのではない。また地域の教材地域的教材というのも、共通の中の教材のとり方を示しているものと解されたい。

鈴木(文部省) たしかに農・工・商・家庭の分類には無理がある。しかし一つの基準を示されているだけであつて、これを以前のよりの考え方で受とつてはならないのではなからうか。共通一本にしてその中に傾斜を作つてもよいので、これは教育内容の共通性を無視したものではなく教育計画をつくるばあいの参考にされるべきである。国の課題こそがわれわれの教育目標であることにかわりがないので、それへの道ゆきとして、学習の場としてどうしても地域を没脚し得ないと考えられるのである。

座長 では時間の関係上、つぎの社会的経済的な知識理解に移る。昨日清原氏から説明があつたように、この試案では、各ブロックに關係のある重要産業がとりあげられているが、もう一つの考え方としては、各ブロックの技術を発展的に考えて、そこから社会的経済的な理解を把握させようとする二つの考え方がある。それについてどうぞ。

林(新潟県) 技術の窓を通して社会的経済的な知識理解へ到達されることが正しいので基礎的技術をうけて「その」とあるのは、そういうことをさすのだと思う。私たちもこの試案のように、産業名をあげて社会的経済的な知識理解をねらつたが、どうしても職業指導における情報のようなものになつてしまひやすい。これではいけないと反省させられてるのであるが、その点について清原先生の御見解を伺いたい。

清原(職研) 社会的経済的な知識理解の進め方について、産業別から入るか、職能的に生産技術から入るかという問題であるが、どちらがよいともいえない。第一のばあいは生産力(労働力・要具・労働対象)から、その多くふくまれた産業をとり出して、現状や問題点をとらえていくので、職業情報面が多くなるといえよう。しかし第二の技術を中心に産業をとらえるとなると、非常に広くなつてまともでないのではないかと心配がある。林君は「その」を技術からと解釈されているが、必ずしもそうとはばかりはいえないのではなからうか。

鈴木(山梨県) 私の地域は機業地であるがそこでは生産技術というよりは、消費の変動が問題である。そこに経済的な理解の面が多く、必ずしも技術を通してのみではできないものがある。こうしたばあいにはインフォメーションだけで終ることもあり得る。それも職・家の社会的経済的な理解として考えるべきではないか。

杉田(横浜市) これは「技術の社会的経済的知識」ということにすれば、非常にはつきりすると思うが……。

1、仕事と結びつかないものはおちてしまふ恐れがある。

2、農・工における關係がないため、別におかなくてはならない。

3、技術の窓という考え方が弱くなる。

4、学校で行う技術はモデル的学習である。それを補う方法として必要である。

5、清原(職研) しかしその二つの方法のどちらがよいかは実践によつて実証されることが大切で、今すぐこれを定めることはできない。

清原(職研) 社会的経済的な知識理解の進め方について、産業別から入るか、職能的に生産技術から入るかという問題であるが、どちらがよいともいえない。第一のばあいは生産力(労働力・要具・労働対象)から、その多くふくまれた産業をとり出して、現状や問題点をとらえていくので、職業情報面が多

1、職業情報となりやすい点
2、産業が並列的で機能性をかく
3、主要技術の機能性が失われる

と想つたが、準備も整はず時間もないので、私の説明で終らして頂きたいと思う。

ここで池田氏より別掲のような意見の開陳があり、今後の方針としては、研究だけでなく教育運動としての任務を強調し、会員の協力を要請した。

つづいて中央産業教育審議会の建議案について、速やかに指針を示すようとの要望(同会長及び文部大臣宛)を満場拍手の裡に決議して、意義ある協議会を終了した。

と想つたが、準備も整はず時間もないので、私の説明で終らして頂きたいと思う。

ここで池田氏より別掲のような意見の開陳があり、今後の方針としては、研究だけでなく教育運動としての任務を強調し、会員の協力を要請した。

つづいて中央産業教育審議会の建議案について、速やかに指針を示すようとの要望(同会長及び文部大臣宛)を満場拍手の裡に決議して、意義ある協議会を終了した。

津久井郡牧野中学校 選山正
沼津市第二中学校 菅誠
浜松市西部中学校 長谷川よし一
引佐郡三カ日中学校 山本秀雄
山梨県甲府市西中学校 古川正賢
望月教三
南巨摩郡甲南中学校 望月教三
同富士吉田市下吉田中学校 望月教三
新潟県中頸城郡大滝中学校 林恒次
受知県碧南市新川中学校 村泰雄
奈良県大和田市教育委員会 中井貞治
同高田市片塩中学校 中井貞治
京都府船井郡園部中学校 磯部喜代三
大阪府生野区大池中学校 井上健一
兵庫県朝来郡梁瀬中学校 瀧島初美
鳥取県東伯郡東伯中学校 瀧島初美
島根県邑智郡若谷中学校 柳楽幸三
愛媛県南宇和郡御莊中学校 中岡修也
大分市王子中学校 倉田丑太郎
後藤武

稲垣(愛知県) 私の学校では、大きく消費・生産・流通にわけ、更に技術的に十一の分野を定めているが、その各分野において、社会的経済的理解を機能的に取り扱っている。それが可能であり、正しいと思つている。

座長 この問題については、私にも意見があるが、あとの予定もあり、時間もないのであとで皆さんの御意見を参酌して研究することにして、つぎに進ませて頂きたい。それは職業教育研究会の今後の方針であるが、それは同時に、産業教育または職業・家庭科の今後の方針ともいえるので、その説明をさせて貰いたい。実はそれによつて会名の変更まで考へていて、会員である皆さんにはかりたい

協議会参加者名(敬称略)

岩手県胆沢郡水沢中学校 後藤忠雄
山形市第五中学校 佐藤誠孝
仙台市宮城野中学校 斎藤四男
栃木県那須郡武茂中学校 三尾谷寛
同黒田原中学校 田代好夫
埼玉県葛飾郡春日郡中学校 渡辺官夫
千葉県市川市第一中学校 水越康夫
同第四中学校 徳貞夫
同安房郡豊房中学校 吉田裕一
東京都葛飾区奥戸中学校 大川壱雄
同神奈川県横浜市大綱中学校 杉田正雄
同小田原市第二中学校 石川正徳
同川崎市御幸中学校 和田茂

長谷川淳
鈴木種生
池田一
杉山道寿
清原邦男
中村邦男
渡部俊雄
島崎政太郎